

カンボジア日本人社会からの情報配信

—カンボジアのフリーペーパーについて

西村 清志郎

1. カンボジア関連の日本語フリーペーパー一覧（一部有料あり）創刊順

1998年4月より2023年3月まで、カンボジアで発行された日本語冊子、フリーペーパーは計18誌（一部有料版も含む）。また14誌は休刊とはうたっているものの、事実上の廃刊となっている。

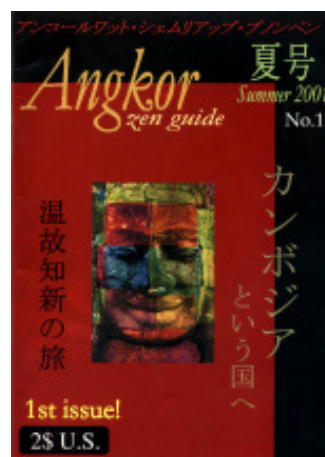
媒体名：ロンパオ（龍包）
出版年：1998年4月創刊、同年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：—
刊行頻度：月刊
ウェブ：<http://www.hehehe.net/pao/>

主にアジア関連の旅行書籍を執筆しているクーロン黒沢氏が発行した、カンボジア初の日本語フリーペーパー。



媒体名：アンコールゼンガイド
出版年：2001年4月創刊、2003年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：A5判
刊行頻度：年3回

初号のみ有料（2US\$）販売、2号目以降無料。アンコール遺跡及びシェムリアップの観光情報を主に扱っていた。



媒体名：アンコール・エクスプローラーズ
出版年：2002年9月創刊、2003年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：A5判
刊行頻度：不定期

少しマニアックなアンコール遺跡情報、シェムリアップの観光情報を紹介していた。当時バックパッカースタイルの旅行者も多く、ニーズは高かった。



媒体名：オークン (Or Koon)
出版年：2002 年 12 月、2003 年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：A5 判
刊行頻度：年 4 回発行

日本語と英語併記。主にシェムリアップの観光情報を紹介していた。オークンはクメール語で「ありがとう」の意味。



媒体名：ニョニウム (NyoNyum)
出版年：2003 年 10 月創刊、
2023 年 3 月現在も発行中
出版者：—
出版地：—
判型：—
刊行頻度：隔月（初号から 12 号までは月刊）
ウェブ：<https://nyonyum.net/ja/>

カンボジアの伝統や文化、生活情報などを主に紹介している。ニョニウムの意味はクメール語で「笑み」である。日本語版だけでなく、クメール語版も発行している。



媒体名：はうとう@かんぼじあ
出版年：2006 年 1 月創刊、2009 年 4 月廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：A5 判
刊行頻度：年 3 回

シェムリアップ及びプノンペンの観光情報を紹介しているガイドブック型媒体。ウェブサイトとの連携、バックナンバーの無料ダウンロードなど、カンボジア初の試みも多かった。



媒体名：クロマートラベルガイドブック
出版年：2006 年 9 月創刊、
2016 年、2020 年と休刊
出版者：—
出版地：—
判型：—
刊行頻度：年 4 回
ウェブ：<https://krorma.com/>

カンボジア全土の観光情報を紹介している。旅行会社が母体であり、シェムリアップにメインオフィスがある編集部であったため、旅行者向けの観光情報が多い誌面構成である。2016 年休刊後、一度名称変更されていたが、2017 年には再度クロマーマガジンとして復刊。



媒体名：D.A.C (Discovery Asia in Cambodia)
出版年：2006 年 10 月創刊、2014 年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：B5 判
刊行頻度：年 4 回

カンボジア国内の観光情報を紹介。主にプノンペン、シェムリアップ、シハヌークビルの三都市の観光情報。旅行会社が発行会社であったため、観光客や旅行会社向けの観光情報が多かった。2014 年には DNA と名称を変更して復刊。



媒体名：トーマダー
出版年：2006 年 11 月発行、2009 年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：A4 判
刊行頻度：不定期
ウェブ：<http://thomada.web.fc2.com/>

カンボジア国内のマニアックなカンボジア情報を紹介。編集長一人で営業から DTP、印刷まで行う自費出版の冊子であった。有料 1.5\$ ~ 2\$。



媒体名：カンボジア・ザ・ライフ
出版年：2007 年 6 月創刊、2008 年廃刊
出版者：—
出版地：—
判型：A4 判
刊行頻度：月刊

日本語、英語、クメール語と 3 言語でカンボジア国内の情報を紹介。カンボジア人向けのフリーペーパー自体が珍しい時代の発行であったため、カンボジア人のファンも多かった。



媒体名：シックスサマナ
出版年：2013 年 5 月創刊
出版者：—
出版地：—
判型：—
刊行頻度：不定期

電子書籍 発行、有料 キンドルで電子書籍版のみを販売。厳密に言えば、カンボジアのフリーペーパーではなく、日本、カンボジアを含む、アジア在住日本人に関する話を面白おかしく、記事として紹介した書籍であるが、カンボジアの話も多いためリストに追加。編集長はカンボジアで初のフリーペーパーを発行したクーロン黒沢氏。



媒体名：プノン

出版年：2013 年 6 月創刊、2021 年 4 月休刊

出版者：—

出版地：—

判型：B5 判

刊行頻度：月刊

カンボジア初の月刊誌としてプノンペンで発行・配布。プノンペンエリアを中心としたビジネス情報、生活情報などが多く、商工会や在住者からのニーズも高かった。



媒体名：D.N.A (Discovery New Asia)

出版年：2014 年 3 月創刊、2018 年 6 月休刊

出版者：—

出版地：—

判型：A4 判

刊行頻度：年 4 回

ウェブ：<https://www.dac-asean.com/magazine/>

DAC が名称を変更し復刊。カンボジア国内の観光情報だけでなく、少しマニアックな国の紹介など、やはり旅行会社が母体となる冊子ならではの誌面構成。



媒体名：カンボジアビジネスパートナーズ

出版年：2014 年 3 月創刊、

2019 年 12 月版で休刊

出版者：—

出版地：—

判型：A4 判

刊行頻度：年 2 回

ウェブ：<https://business-partners.asia/cambodia/>

カンボジアでビジネスをしている外国人事業家をインタビュー紹介していた。日本人以外のビジネス紹介も多く、カンボジアで起業を考える日本人からの評判も高かった。主にプノンペンで配布。現在は Web での配信のみ。



媒体名：くろまる

出版年：2014 年 7 月創刊

出版者：—

出版地：—

判型：A2 判

刊行頻度：不定期

ウェブ：<https://kuromaru.asia/>

日本人旅行者向け、地図をメインとした新聞スタイルの媒体。内容はシェムリアップ在住日本人の活動紹介、カンボジアでの生活情報など。主にシェムリアップで配布。2020 年初頭よりコロナにより一時休刊となっていたが、現在は半年に 1 度程度 of 不定期発行。



媒体名：プノンペンプレスネオ

出版年：2015 年 1 月創刊、2019 年 4 月廃刊

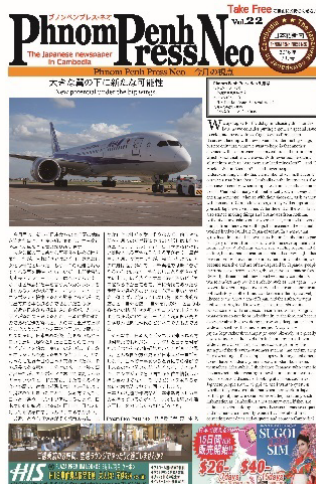
出版者：—

出版地：—

判型：A2 判

刊行頻度：月刊

日本語と英語の 2 言語でカンボジア関連ニュースを紹介。発行部数も多く、プノンペンの日系飲食店などでの配布が目立っていた。



媒体名：Cambodia SKETCH Travel
& Life Guidebook

出版年：2017 年 1 月創刊、2018 年休刊

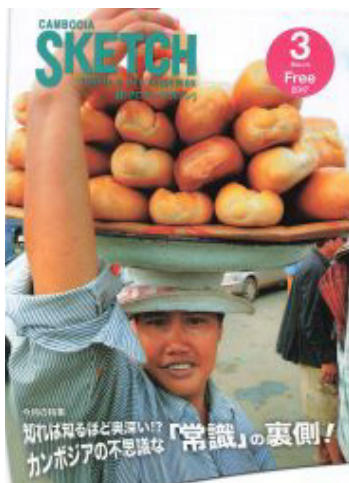
出版者：—

出版地：—

判型：B5 判

刊行頻度：月刊

クロマーマガジンの姉妹誌であったベトナムスケッチ編集部が、休刊したクロマーマガジンを復刊させたもの。編集部自体はベトナムにあったこともあり、内容は比較的シンプル。



媒体名：クロマーマガジン

出版年：2018 年 1 月創刊

出版者：—

出版地：—

判型：—

刊行頻度：年 4 回

ウェブ：<https://krorma.com/>

カンボジアスケッチが休刊し、再度クロマーマガジン編集部がコンセプトを一新して復刊。在住日本人向けの国内旅行紹介など。2020 年初頭に、コロナの影響を受け休刊となったが、2023 年 7 月復刊。



フリーペーパーとは

フリーペーパー ... 身近な生活情報などを掲載し、限定した地域の家庭などに無料で配布する新聞や雑誌。また、駅頭や街角に置いて、自由に持ち帰ることができる新聞や雑誌。発行や配布にかかる経費は広告収入でまかなわれる。特に、雑誌の形態をしたものはフリーマガジンとも呼ばれる。(引用:大辞泉)

2023 年 3 月現在、カンボジアで定期的に発行されている日本語フリーペーパーは「ニュニウム」1 誌（復刊準備中、不定期刊行分を含むと 3 誌）だけである。これは、2019 年末から始まった新型コロナウイルス感染症の影響を受け、それまで発行されていた日本語フリーペーパーが軒並み休刊、廃刊となってしまったことによる。

実のところ、フリーペーパーと一口にいても新聞スタイル、雑誌スタイルに分かれ、さらに雑誌スタイルでも、毎号違った切り口のコンテンツが紹介されるマガジンタイプと、地域の情報をメインに更新されるガイドブックタイプ、そしてその合併型となるものがある。カンボジアの場合、首都

プノンペンで発行されるものは長期在住者向け、及びビジネス渡航者向けのマガジンタイプの誌面構成となっているが、短期滞在者が多い観光都市シェムリアップでは、やはり観光情報が中心となったガイドブックタイプのものが多く発行されている。

フリーペーパーから読み解くカンボジアの日本人社会

さて、カンボジアで発行された日本語フリーペーパーとその遍歴を見ていくと、カンボジア特有の日本人社会の実情が読み解けてくる。カンボジア初のフリーペーパーが発行された1990年代から2000年代初頭にかけ、カンボジアには多くの日本人旅行者が世界遺産アンコールワットを一目見ようとシェムリアップ観光に訪れだしていた。カンボジア観光省が発表する統計を確認すると、国籍別海外渡航者数で日本は常に上位3位以内となっており、右肩上がりの状況が続いていた。

そのため、2006年から2007年度にかけては新しく4誌が創刊し、それまでに発行されていた2誌と合わせて、計6誌が競合することとなった。その後、2008年9月に起こったリーマンショックの影響を受け2誌が廃刊したものの、2010年にはJETROがカンボジアに事務所を開設し、多くの日系企業がカンボジアに注目、2014年にはカンボジア初となる大型商業施設としてイオンモールの出店が報道された。

そのため、それまではシェムリアップに訪れる短期旅行者向けに作られていたフリーペーパーから、2013年以降はプノンペンエリアに特化したビジネス渡航者や長期在住者向けの誌面構成となるフリーペーパーが急増することとなったが、現在の状況は、先に挙げた通りである。

日本語による情報配信の移り変わり

さて、ここまでカンボジアのフリーペーパー事情に焦点を当てていたが、現地での日本語での情報配信方法は世界のそれと同様に急激な変化が進んでいる。カンボジアの多くのフリーペーパーは、紙での限界を感じ、休刊後はそれぞれのウェブサイトやブログなどでの情報配信を継続していたが、情報の拡散力や、即効性も高い、フェイスブックやエックス(旧・ツイッター)、インスタグラムなどのSNSへ

と情報配信方法は切り替わっている。中でもカンボジア在住日本人にとって、最新のカンボジア情報を収集するにはフェイスブックが最も有効なSNSであると言え、特にコロナ禍での情報収集は専らフェイスブックが活用されていた。またユーチューブなどの動画を活用した情報配信も急増しており、今後もこの傾向はしばらく継続すると考えられる。

しかしながら、SNSの弊害として、最新情報は流れてくるものの、匂が過ぎた情報に関してはなかなか探すことが難しいというシステム上の問題もある。今後長期にわたって残しておきたい情報に関しては、ウェブサイトやブログでの情報保管と配信が求められているのも実情である。